

資料・統計

2004 年婦人科入院悪性腫瘍統計

Annual Report of Gynecologic Malignancies in 2004

児 玉 省 二 萬 歳 千 秋 富 田 雅 俊 海 部 恵 美 子
 笹 川 基 本 間 滋

Shoji KODAMA, Chiaki BANZAI, Masatoshi TOMITA, Emiko KAIBE,
 Motoi SASAGAWA and Shigeru HONMA

要 旨

2004 年に当科で入院治療を行った悪性腫瘍患者について、疾患別ならびに臨床進行期分類別の症例数と年齢および治療内容について集計報告する。入院以外の外来治療例は本統計には含まれていない。

1. 入院全悪性腫瘍患者

2004 年に入院治療した悪性腫瘍の新鮮例は、子宮頸部腫瘍 172 例、子宮体部腫瘍 52 例、悪性卵巣腫瘍 38 例、卵管癌 2 例、膣癌 3 例、外陰パジェット病 2 例、悪性中皮腫 1 例の合計 270 例であった。

最近 7 年間の子宮頸部腫瘍、子宮体部腫瘍、卵巣腫瘍の年次別推移では(表 1)、1998 年は子宮頸部腫瘍 65 例(異形成 8 例、上皮内癌 18 例、浸潤癌 39 例)、子宮体部腫瘍 25 例(上皮内癌 0 例、浸潤癌 22 例、肉腫 3 例)、悪性卵巣腫瘍 31 例(境界悪性 5 例、悪性 26 例)であった。そして、2004 年には子宮頸部腫瘍 172 例(異形成 21 例、上皮内癌 52 例、浸潤癌 99 例)、子宮体部腫瘍 52 例(上皮内癌 3 例、浸潤癌 45 例、肉腫 4 例)、悪性卵巣腫瘍 38 例(境界悪性 8 例、悪性 30 例)となり、子宮頸癌では浸潤癌、子宮体癌と卵巣癌はともに増加したのが特徴的であった。

2. 子宮頸部腫瘍

表 2 は臨床進行期別症例数と年齢(平均年齢、年齢分布)の関連を示しているが、0 期(上皮内癌)は 52 例で、平均年齢 38.0 歳、年齢分布 19-69 歳であった。Ia 期の初期浸潤癌は 54 例(Ia1 期は 53 例)で、平均年齢 41.1 歳、年齢分布 25-70 歳であった。この両進行期は全体の 70.2% を占めているが、若年者であれば子宮温存が可能な段階である。そして、進行期が進むに従って高齢となり、全体では平均年齢 44.1 歳、年齢分布 19-83 歳であった。

治療内容では(表 3)、手術例は 141 例で全体の 93.4% を占め、その内容は LEEP(Loop Electrosurgical Excisional Procedure)22 例、円錐切除単独 51 例、単純全摘 16 例、準広汎全摘 19 例、広汎全摘 33 例であった。子宮温存治療は、病変が狭く妊娠希望を行う上皮内癌が対象となる LEEP と病変が広い上皮内

表 1 入院悪性治療症例(子宮頸部、子宮体部、卵巣)の過去 5 年間の年次別推移

臓器	病変	1998 年	1999 年	2000 年	2001 年	2002 年	2003 年	2004 年
子宮頸部	異形成	8	4	5	5	8	32	21
	上皮内癌	18	18	16	36	36	58	52
	浸潤癌	39	20	25	22	49	55	99
子宮体部	上皮内癌	0	0	1	3	0	4	3
	癌	22	17	18	34	20	28	45
	肉腫	3	1	2	1	0	1	4
卵巣	境界悪性	5	3	2	3	7	6	8
	悪性	26	25	18	20	25	23	30
合計		121	88	87	124	145	207	262

新潟県立がんセンター新潟病院 産婦人科

Key words: 婦人科悪性腫瘍

表2 子宮頸癌の臨床進行期別数と年齢

進行期	症例数	平均年齢	年齢分布
0	52	30	19 - 69
I a	54	41.1	25 - 70
b	30	50.7	30 - 89
II a	1	23	23
b	6	56	41 - 72
III a	1	72	72
b	4	66.5	56 - 80
IV a	2	79.5	77 - 82
b	1	83	83
合計	151	44.1	19 - 83

表3 子宮頸癌の治療内容

治療内容	症例数
手術療法	
LEEP	22
円錐切除	51
単純	16
準広汎	19
広汎	33
照射療法	
単独	10
合計	151

表4 子宮体癌の臨床進行期別数と年齢

進行期	症例数	平均年齢	年齢分布
0	3	39.7	27 - 47
I a	3	47.3	32 - 59
b	22	60.7	35 - 89
c	8	60.8	45 - 75
II a	0	-	
b	3	46.7	42 - 55
III a	3	65.7	49 - 84
b	0	-	
c	2	61	55 - 67
IV	4	59.8	49 - 83
合計	48	58	27 - 89

癌あるいは微小浸潤癌 (Ia1 期) に対象となる円錐切除術が最も多く手術例の約半数 (51.8%) を占めていた。放射線療法は 10 例であった。

3. 子宮体癌

表 4 は臨床進行期別症例数と年齢 (平均年齢、年齢分布) の関連を示しているが、上皮内癌 (異形内膜増殖症) 3 例、Ia 期 3 例は平均年齢 47.3 歳、年齢分布 32-59 歳、最も多い Ib 期は 22 例で平均年齢 60.7 歳、年齢分布 35-89 歳、Ic 期 8 例は平均年齢 60.8 歳、年齢分布 45-75 歳であった。II b 期 3 例で平均年齢 46.7 歳、年齢分布 42-55 歳、III 期は 5 例で、III a 期 3 例は平均年齢 65.7 歳、年齢分布 49-84 歳、III c 期 2 例は平均年齢 61.0 歳、年齢分布 55-67 歳であった。IV 期の 4 例は平均年齢 59.8 歳、年齢分布 49-83 歳で、全体の 48 例では平均年齢 58.0 歳、年齢分布 27-89 歳であった。

表5 子宮体癌の治療内容

治療内容	症例数
温存	3
手術単独	20
化療併用	23
化療単独	2
合計	48

表6 悪性卵巣腫瘍の臨床進行期別数と年齢

悪性度	進行期	症例数	平均年齢	年齢分布	
境界悪性	I a	7	46.1	23 - 78	
		0	-		
	II b	1	30	30	
		0	-		
	悪性	I a	7	45.4	27 - 62
			0	-	
6			40.3	28 - 66	
II a	0	-			
	1	26	26		
	1	46	46		
III a	0	-			
	1	70	70		
	8	59.5	46 - 68		
IV	6	52.8	46 - 60		
	38	48.6	23 - 78		
合計					

表7 悪性卵巣腫瘍の治療内容

治療内容	症例数
手術単独	14
化療併用	18
化療単独	6
合計	38

治療内容では (表 5)、子宮温存治療 3 例、手術単独は Ib 期までの 20 例で、highrisk group の 23 例には化学療法が併用され、進行例で化学療法単独 2 例であった。

4. 卵巣癌

表 6 は臨床進行期別症例数と年齢 (平均年齢、年齢分布) の関連を示している。境界悪性腫瘍は、Ia 期 7 例の平均年齢 46.1 歳、年齢分布 23-78 歳、II b 期 1 例は 30 歳であった。悪性の浸潤癌は、Ia 期 7 例の平均年齢 45.4 歳、年齢分布 27-62 歳、Ic 期 6 例の平均年齢 40.3 歳、年齢分布 28-66 歳であった。II 期では、II b 期 1 例は 26 歳、II c 期 1 例は 46 歳であった。III 期では、III b 期 1 例は 70 歳、III c 期 8 例の平均年齢 59.5 歳、年齢分布 46-68 歳であった。IV 期は 6 例で、平均年齢 52.8 歳、年齢分布 46-60 歳であった。全体では、平均年齢 48.6 歳、年齢分布 23-78 歳であった。

治療内容では (表 7)、手術単独で終わったのは境界悪性 Ia 期 7 例と浸潤癌 Ia 期の 7 例で、化学療法併用 18 例、化学療法単独 6 例であった。